

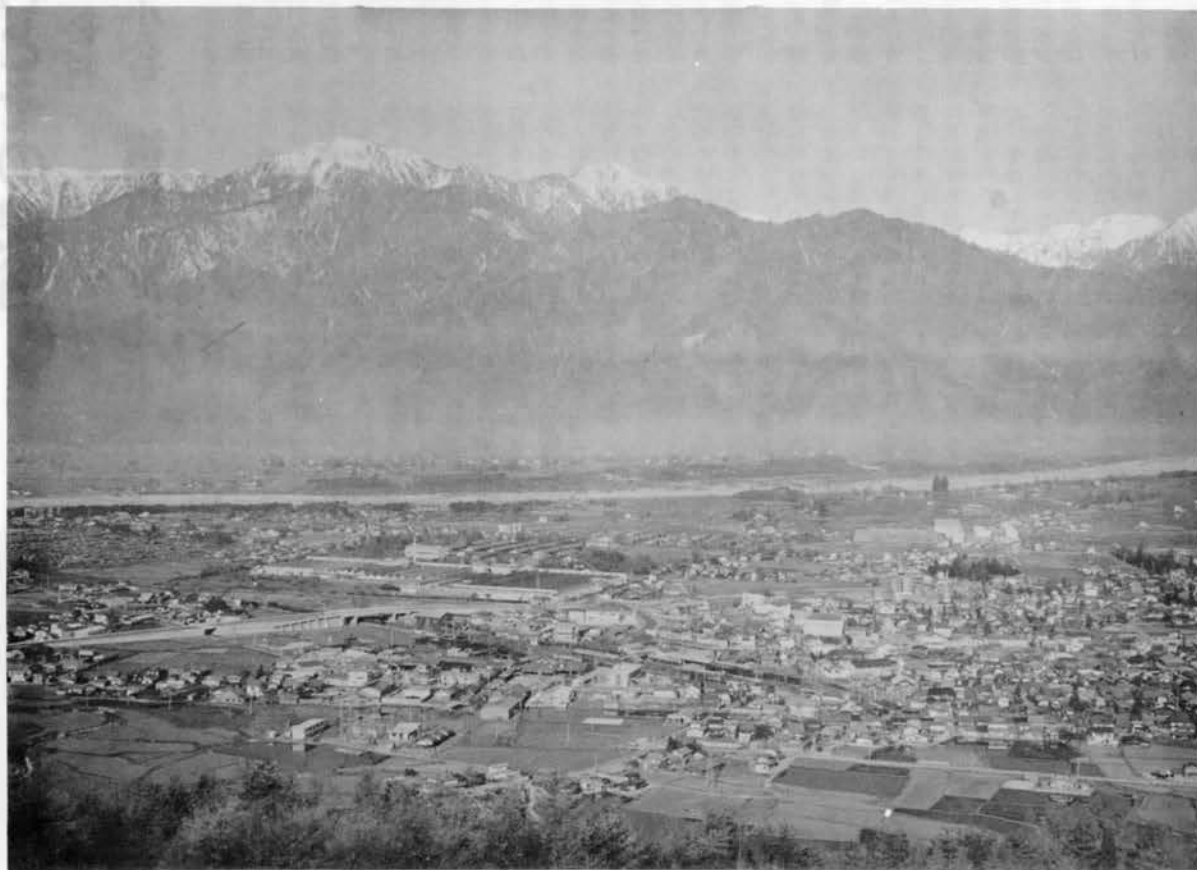
山と博物館

第17巻

第2号

1972年2月25日

大町山岳博物館



大町の上空に棚引く二層の煙(上の層は昭電大町工場火力発電所の煙)

1971年6月14日午前7時30分

撮影 伊藤美嗣

北アルプスと大気汚染

爺・鹿島槍・五竜と連なる後立山の連峯、その峯々の頂がバラ色に輝き、次第に朝の光は山腹を照らし山麓に及ぶ。幾年、幾朝となく見られた北安曇野のさわやかな朝の景色である。

しかし、昔ながらのすばらしい朝の西山を確実に眺めたいなら、晴れた日に、大町の市街地を夜明けとともに抜け出して東山へ登らなければならぬ。風のおだやかな朝なら街の上には朝霧のない日でも、きつと薄もやのように、時には霧のように煙霧が棚引いているだろう。しかし、上空は比較的スカッとしており、美しい山を眺めることができる。鮮明な山の写真を撮りたいなら急ぐがよい。日が昇ると間もなく、煙霧層はくずれ、大気の混合が起り、視界全体が薄ぼけて、山はすっかりかすんでしまうからだ。

煙霧層をつくる物質にはいろいろある。主なものは工場・住宅などの煙突から出る煙と自動車の排気中の不完全燃焼物である。これらの微粒子が大気中にただよい視程を悪くしている。火力発電所の煙や自動車の排気ガスの中に含まれる亜硫酸ガス・窒素酸化物・一酸化炭素、アルミ製造工場から出るフッ化水素などの有毒ガスも、煙霧層の中に多く含まれるという。これら大気汚染物質は風や上昇気流によって運び去られたり、降下・沈着したり、雨や雪に収着して大気中から除去されるが、容易に放散・除去されない場合もある。

大気汚染物質の放散をさまたげる最大ものは気温の逆転である。夜間、放射によって地表が冷え込むと下層の大気が上層より冷くなり、接地逆転が起る。気温の逆転が地表近くに強くできると煙突から出た煙は上空へ昇れずに横に棚引き、地表近くに溜って汚染が高まる。逆転は放射による接地逆転だけでなく、前線によってつくられる逆転や、大町のように三方を山で囲まれた地形のところでは、夜間、冷たく重い空気が山から流下して低地にたまるために起る地形性逆転も起る。

しかし、山や逆転層に公害の責任はない。汚染は人間の所産、山は被害者である。(海川庄一)

消えゆく山村とその民俗

北安曇郡小谷村

大字北小谷

横川・戸土

青木 治

「過疎を通りこすと、ムラは消滅する」これは僻地山村の運命になりつつある。姫川温泉大網を通って、その奥地横川部と、新潟県の大糸線の根知駅口から根知谷を遡ること、ジープで数十分、暗れた夜などは、微であるがイカ釣の灯火が見えるという。信州でただ一ヶ所日本海の見えるムラ、根知谷の最奥の山村である。高台の地、戸土に達することができ。安曇地方の俚諺に「とど(戸土)のつまり」という言葉がある。これは信州のドツツマリ、即ち最北端ということで、信越国境の地という意味である。戸土は越後に近接しており、市町村合併で、糸魚川市に合併された旧大久保村は、戸土の家の雨垂の一部が越後に落ち、越後の土地に流れているという。この横川、戸土の両部落は正に、消滅寸前にまできている。

この両部落を、さらに詳しく分けると、横川は横川の本村と殿行、戸土は戸土の本村と押廻・仲又の三つに分けられている。この横川、戸土を総称して、昔から三ヶとか、三ヶ耕地と称している。

この三ヶ耕地の戸土、横川は七百町歩の共有林を持っていたし、学校も戸土分校に学ぶなど、共通の場を持っていた。この両部落の経済圏を見ても、通婚圏を見ても、根知谷から糸魚川方面に拡がる糸魚川圏で、信州とは交渉が少ない。

次にこのムラとして、特徴ある事項を記す

一、**薙鎌祭(薙鎌打ちの神事)**
薙鎌は諏訪大社の御神体の象徴といわれている。鉄製で鋸の歯の部分の反対にしたよう

な、鶏頭の形をしたものである。七年に一度諏訪の下社の神主が、この御神体を奉じ、小谷惣社といわれる、小谷村中土中谷の諏訪社に一たん落着き、行列を整へ、昔は山路を峠越しに、今は自動車で、唐櫃に取められた薙鎌を、戸土の境の宮の諏訪社か、仲又の小倉明神の神前でお祭を行い、太い御神木の幹に神主が打込むのである。この神事は両社交互に行うから、一社では十四年目に一度となる。この両神社はムラの氏神様であるから、ムラ人の参加により行われる。境の宮は戸土の本村、小倉明神の場合は仲又の三軒が主となつて行われた。

この神事は江戸時代以前からのことであり元禄の頃の信越国境争論の折には、信州側勝訴の有力な証據として、この薙鎌の御神木をあげたという。この薙鎌祭はその後も七年おきに続けられてきたが、一時中絶したが、近年また復活し、現在に至っている。両社の御神木には現在この薙鎌が数個、幹の深くに打込れているし、昔切倒した御神木の幹からも数丁でている。形も昔のもの、今のもの多少の変化があり、歴史を採ねるに貴重な史料である。

二、牛士(牛方)と塩

糸魚川から今の小谷村千国に出るには、昔は山口の番所(越後)から大網を経て、千国の番所へ出るのが、本筋であった。一部は横川から大網への通路もあった。江戸時代信越の荷物は、地塩(日本海の塩)、竹原塩(瀬戸内海の塩、広島県竹原市)や四十物と称する海産物を主とした雑貨が、ポッカが大勢の

牛士等によつて運ばれた。牛士は一人で六頭の牛の手綱を取れるものが一人前で、六頭を越すと一人の補助者が必要とされた。横川には牛宿もあり、今でも何匹かたくさんさんの牛を入れた大きな厩のある家がある。女衆はこの牛宿の厩に繋がる牛の餌の草を刈って、相当の小使銭かせぎをした話や、裏の開戸で、柘酒(一合)を売った話も残っている。この牛士になるには、オカミの免許が必要であった。牛士達は番所名の入った免許札を持って往來した。戸土、横川にはこの牛士が両部落合せて十数名おつたようである。

三、お講様とオカイ番

お講様とは念仏講のことである。戸土横川ではお堂、押廻、仲又では当番の家(頭屋)に月の二八日集まり、阿弥陀様の絵姿の掛軸を掛け、読経念仏(称名取)をし、当番が米三合宛各戸から集め、オカクと称し昼食を共にした。この時は老人も子供も全員集まった。一二月二八日は、本講様といひ特に賑やかにし、後の御馳走も多かった。

またお堂の阿弥陀像や掛軸の阿弥陀様に毎朝御飯やお花など当番が供えることをオカイ番といつた。どの部落でも最近まで続けていた。明治一四年には京都東本願寺の両堂再建の折、樺の大木三本を寄附しムラ人や根知谷の人々の協力を得て峠を越えて引出しているその手柄により、明治一七年七月、九十字御名号「老流を、横川村真宗大谷派門徒中に贈つてやる。

四、戸土のお堂

このお堂には等身大より稍々小型の阿弥陀坐像と蓮如筆の模写の阿弥

陀像掛軸がある。何れも立派な美術的価値の高いものと思われる。前者の仏像は口伝によると、最初糸魚川市の浄土宗善導寺にあったものを、一度山口に遷した処、仏がムラ人の夢枕に立ち、もつと高層の地を指向したので山口の人々と戸土の人々が計り、土地を寄進し、お堂を建てここに遷座せしめたという。不思議にこの近くまでは、火災や地じり頻発しているが、ここにはかかる天災は一度もない。あらたかな阿弥陀様だという。

五、厩肥の運搬

ここでは昔から馬は殆んど飼わなかつたが牛は何処の家でも飼っていた。家に入つて左側には必ず大きな厩屋がある。ここで牛を飼っていたのである。この地方で盛んに牛が飼養されたのは、前述の牛士の伝統によるものと考えられる。江戸時代には、地牛と秋田の南部牛が飼われたとみられ、南部牛買入の記録もある。何れにせよ運搬用、農耕用としての牛の飼養は大きな仕事であった。

稲作にはこの牛の踏む厩肥大切な肥料であった。階段のごとき天上田に、この厩肥を施すには、先ず厩舎からサスと称する。堅木で作った自家製の道具で、戸外に厩肥をその先に引かけて、引出す。あるいは既に戸外に、



仕事著 短着ハダコとフンゴミ

積んである厩肥を、三月頃の残雪の堅い雪上を繰って運んで田の上におくか、あるいは家よりの田は、シヨイコで人の背で運んで田んぼの雪の上におく、一反歩百こが基準で、春先の田んぼの白雪の上に点々と厩肥の黒い小山が見えるのが、初春の風景でもあった。

六、田起しと三刃万能鋏

動力、畜力利用以前は、田起しは、手に豆を作りつつ人力で起したものである。まして天上田の土地柄であるから、小さな田が多い。動力機械時代に入った昨今でも人力による田起しをせねばならぬ水田も可成あった。横川ではムラ中がユイで、共同して三本刃の先が薄く、連結した独特の三刃万能鋏を使って、ムラ中を次々と田起しして行った。戸土においても、ユイによる共同作業が多かった。

七、田植は女衆の仕事

横川、特に戸土の田植は、根知谷を下流から植えて来るので、最後となる。越後方面の親類や友人、ムラ内の人々と、計画的にユイをする。「苗日は三三日」と言い、六月初旬が田植の時期としている。越後方面からユイできた親戚、知己を含めての共同作業で、次から次と家々を廻って田植をする。

田植は女衆の仕事で、男は骨休みの日で、殆んど手を出さない。この女衆の田植の仕度は全部新調である。晒の肌着に腰巻、活動的な縞のヤマギ(カスリもある)を上肢に、下肢には、足首の方を細くしたイッコギをはき手にはテホイ(手甲)、頭には白スゲ笠(サシメ笠ともいう)である。特に笠の頭当ての部分は黒のビロードを用い、笠緒は美麗な柄物の布をクケて作り、総て田植姿は美しさをほこりとしていた。

朝は四時から朝飯し前に苗取を終り、食事を終って、一株七、八本植で、正四角に植え一人四畦持ちで、夕暮まで行く。

食事は朝、昼、晩と午前、午後の小昼等総て施主持ちで、オハギ(ここではポタ餅のことでなく、オコワをいう)、煮しめ等御馳走

をする。

八、焼畑とソバ

ここでは焼畑耕作は戦後まで行われていた。焼畑をするには、雑草のよく茂っている原野か、元焼畑にした処の草を、夏のお盆前の頃(八月)、草刈をして七、八日乾す。そしてお盆前に火をつけて焼く。雑草の多い処ほど地味か肥えているが、カヤ、スキ等の禾本科植物の多い土地は、痩せており、焼畑には不適當である。

焼畑には、ソバ、大根、カブを播いたが、最も良いのは秋ソバである。

九、麻作りと木綿織

大正の終りから昭和の初め頃まで、麻作りをしていた。春種子を蒔付け、盆前に麻切をし、麻釜を立て、九月の稲刈り前の彼岸の頃、家の庭で麻カキをする。冬中の女衆の仕事として、明治、大正の頃は麻ウミ(ツヅネツカイ)を、ランプや油、ローソクの暗い灯の元で夜なべをしたという。「昔は暗いランプで仕事したに、今の若い人は、明るい電気(電燈)の中で寝ている」これは労働、ツヅネツカイに対する八〇才近い老女の感想である。

電燈の灯ったのは、戸土は昭和十二年、横川は戦後のことである。

斯くしてできた麻糸は、地機か、高機かで麻布にするか、糸魚川の商人がきて、木綿糸との物々交換をするかであった。木綿糸は衣料の自給自足のために、ハタゴにかけられ、カスリ木綿や縞木綿、紺木綿地に織りあげられて、仕事着のハダコ、山ハダコ(短着ハダコ)、股引、イッコギ、フンゴミに仕立てられたのである。麻布や残余の麻糸は高価に取引され、稲作につづく生業であったという。

一〇、チョン髪とおハゲロ

横川には大正十三、四年頃まで、三、四人の老人のチョン髪姿が見られたという。自分で手入を結っていたという。戸土にも数人見られたという。それが次のように変化したという。

チョン髪↓ザンバラ↓坊主↓角刈↓長髪

おハゲロも大正の初め頃まで、既婚の婦人が、白い歯を真黒に染めていた。ジロ(団炉裏)の隅にカメを置き、釘などの鉄屑を重湯に入れて、蓋をしておき、その汁を盃に取りフシ粉(フシの木、ヌルデの粉)と一緒に付けて、歯に塗ると、歯は真黒に染まる。そこで歯の白いは娘で、黒いのは結婚した婦人ということであった。

一一、日露戦争の藁靴

横川の諏訪社の社殿の中に、大きなスツペンジョ(藁靴)が奉納されている。その藁靴の横に次の記録がついている。

藁靴を作る指導員が横川村にきて、その指導の元に、軍靴の上に履く、藁靴を作り八足を供出した旨記してある。又別に総代の奉納

文もついている。

「明治三十七年我が国、露国ト車セシ時、征露軍人ノ寒苦ヲ察シ毎戸平均四足ノ藁靴ヲ製作シテ献納セシモノナリ。

横川氏子総代 小池佐治郎

この氏子総代は明治三十七年の時の総代である。

一二、朝食と焼餅

春は肥まきをした後とか、夏は朝草刈を終えて帰った後とか、必ず朝一仕事を終った後で朝食をとった。朝食は御飯一杯と焼餅一個と定まっていた。

この焼餅を作るには、イリゴ(米の枇の粉未熟米)七升、ソバ三升を混ぜて、水車の石臼で一緒に挽く、ひいた粉を丸節(経一五〇二〇)で篩って粉を取る。この粉に水を加へ、木のくりぬき製のこね鉢でこね、餡や味噌、お菜、小豆や漬菜、季節の野菜などを入れ、茹でてそのまま食べるか、チロのワタシで焼いて食べる。径一〇センチ、中々腹ごたえがあるこの食制は大正の終り頃まで続けられていた。

尚ここでは灰の中では焼かない。

一三、餅搗きと、栃餅など

正月の餅は暮の二八日に搗く習いで、どの家でも、一白三升で、一ニ一六白搗き、餅搗きのユイで、若者三人が組になり次から次の家と、搗いて歩く。どここの家にも、木櫃の四角な重ね蒸籠があり、数だんに重ねて蒸し、白は大きく、杵三本で手がえし、無しで男衆三人で搗く正月の餅は正月中十分食べるだけ十分搗く。その他小正月、節句、御前山祭、お盆、ヌケ祭、祇園祭、氏神様の夏祭、十日夜初誕生、入学祝等々中々多い。



トンゴ底の家

種類も中々多く、白餅を初め、栃餅、栗餅、小きび餅、ウラジロ餅(山ごぼうの葉)など多い。

栃餅は柔らかく、すべらかで、老人達が好むという。

山で拾った栃の実を、天日で三日間乾す。さらに家の二階に上げ、適宜に陰干しする。

次に湯の中に一昼夜入れ、皮ムキ器で斜におして、一個を二、四割にし皮を取る。↓壁

木の灰三升に、栃の実三升の割の灰汁に三日入れると渋味が取れる↓これを良く水洗いする。↓糯米三升、水洗後の栃の実五、六合を入れ、蒸して搗くと、栃餅ができる。

一四、家と豪雪

どこの家の玄関口でも、杉皮か屋根板かで置石をして葺いてある妻入りの巾一間半位のトンボ庇が、家の前方に突出している。その奥が庇続きの大戸があり、さらに奥に内の大戸があり、戸障子により、奥と仕切られている内大戸の左側が便所になっている。ここまでの間の両側は鍔、鎌の農具、蓑笠等を掛けている。突出た庇を妻入様にしたのは、一日に一日余降る雪や屋根から下した雪で、入口がとざされぬようにしたものと思われる。屋根の高さに達する豪雪から、家を守るため、家壁の周囲の部分は板で囲っておくし、縁側等には格を入れ、雪に対処する。

山村の家の機能は複雑である。大戸の奥の左側が牛を飼った厩、右側が日常生活をするイドコ(オエ)と称する。ジロ(囲炉裏)ある間、厩の奥には、ニワと称する作業場があり、米の調整などをする。それと並んで、米等をおく小部屋、流台のある水屋、味噌、漬菜を貯蔵する漬物部屋、イドコの奥の表側には、上客を接待する座敷があり、裏側の方には、狭いが仲之間、へやと称し、タンス等を並べ、同時に、ネマ(寝室)にしている。

かくこの家は、畜舎、仕事場、貯蔵庫、日常生活の場という、多くの機能を具えている。

一五、ジロ(囲炉裏)とオカギ様

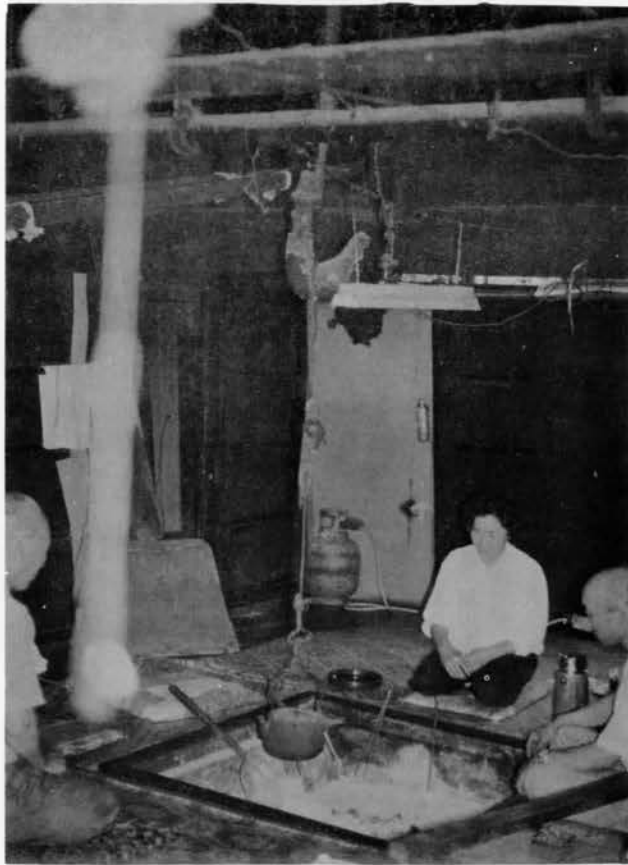
イドコの中心はジロである。三尺九寸と三尺の大きな炉ぶちの中央には、上から火やまと、太くて大きい第一段のカギ付と、その大カギに、更にかけた普通のカギ付と、即ちオカギ様が三つあっており、鉄瓶で湯を沸し、鍋で煮物や御飯を煮た。(ここでは釜は使わなかつた)今はヌケ(地じり)のためこの家も多少は傾いておるので、天井から太い麻縄でさげたオカギ様は、ジロの中央へはさがらず何れも端の方へよっている現状である。

一六、三ヶ耕地総代とユイ

三ヶとか、三ヶ耕地というのは、戸土本村(押廻を含む)と仲又、横川の三ツの耕地と地総代である。この総代は一年交代であるが半世襲的と思われる八人の主立(戸土四、仲又、押廻二、横川一)の中から、選り、正月七日の初寄合後、役送りをする。役送りに役ダンス二種を、旧の家で飲んだ後、新の総代の家へ、石場加持の歌(新築の家の土

台下を固める時の歌)で景気をつけつつ、かつぎ込む。総代はムラの政治の中心の仕事で会計も兼ねて行く。

ユイのことを、北安曇の各地では、エエとか、エエッコというが、ここでは正しくユイという。ユイの本来の意味は、個人と個人が一对で労力の交換をすることであるが、ここでは、特定の一人が数人から数十人、然もユイがへしをする時は数年から数十年に渡ることがある。手伝いの感じのあることも含められている。例えば数年に一度の屋根葺、その材料のカヤ場のカヤ刈、カヤ巻、何年かに一度か、一代にあるかないかわからない、建前(上棟式)屋こぼし(家をこわすこと)等には、義務人足として、ムラ人全員で行くもの。また施主でも、義理としても、手伝いを受けるものとしている。地じり等の天災に際してもムラ人の迅速な協力、家の危険に類することなどに対しての処置等協力的、共同的性格が非常に強い。



イドコ(オエ・居間)の部屋のジロ(イロリ)の附近

追記

この稿は、小谷村教委と共に調査研究した一端です。この四月上旬「小谷の民俗」という書籍が小谷村教委の編集で発刊されますがそれと合せ読まれると有難たいと存じます。(北安曇編集委員)

カモシカの国際登録

国際自然保護連盟の保存委員会のひとつの活動として保護が必要とされる野性動物で、動物園に飼われているものを登録させる仕事があります。

日本ではタンチョウに引き続いて新たに昨年カモシカが国際登録されることになりました。登録責任者は自発的に登録事務を引き受け集計して、毎年本部へ報告し、国際動物園年報、その他の出版物に発表する責任をおうということになっています。

カモシカの登録責任者は多摩動物公園の小森厚さんが引きうけてくださり、その小森さんの手もとに集まった一九七一年三月三十一日現在の飼育下のカモシカの数は、9園館、四十一頭です。

このうち飼育下で繁殖したものが二十一頭となっておりませんが、昨年春に生れたもの、あるいは保護されたものを加えますとこの数はさらにふえていますものと思えます。

山岳博物館で飼育されている飼育日数最長記録の岳子(5)大助(6)岳三(7)和歌子(8)あつ子(9)太郎(10)木曾生(11)もそれぞれ登録され(内のような登録ナンバー)ももらいました。

昨年生れた子どもや保護されたものも今年新たに登録をされることになっています。

山と博物館第17巻第2号
一九七二年二月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL026-2211
印刷所 大町市下仲町 山岳博物館
大町市下仲町 大糸タイムス印刷部
定価 年額四〇〇円(送料共)(切手不可)